「詩の世界」で久方ぶりに游ぶ

馬場駿

万里小路先生の『孤闘の詩人　石垣りんへの旅』(以下本書と記す)を譲り受けて拝読し何十年ぶりだろう「詩の世界」で大いに游んだ。もちろん専ら自分の狭い心の中でのことではある。厄介でもあり楽しくもあった。それは、詩の素人である私に書評はもちろんのこと、的確な感想すら不可能なことは百も承知の、行きつ戻りつする迷い道だったから尚更のことだった。進む方向の正誤が解らないものほど魂は昂奮をする。

私は、詩の同人誌を編む友人から年に二回から三回送られてくる詩誌には必ず「今号で好きだった作品」として数編それぞれに感想を述べてお礼に代えている(例示として別添)。あくまでも好きな理由であって批評ではない。これから本文で作品のタイトルがでてきても基本的には同様の立場だとしてご了解願いたい。

本書に向かい数十頁進んだところで、やはりというか、どうしてもそうなるというか、一旦読むことをあきらめるしかなかった。詩だけを鑑賞したいと思ったのだ。著者はどれほどこの詩人を研究したのだろう。きっとそれは感嘆すべきレベルなのに違いない。しかし、こんな風に解釈できるのかと驚いたり感動したりする一方で、目を背けたり反発したりする自分がいる。理由は一つ、「俺は俺の目と心で鑑賞したいのだ」というこ

と。読み解くが読み得とは限らない。多くの場合人は、自分なりに詩を良いと感じ、はては愛誦の対象としている。だが、それはなぜかと調査し、論評したいという動機とは直接つながらない。評論者は自分の調査結果や思索の果てに得た詩への想いを論理的に綴るが、もしかしたらそれは他の鑑賞者の邪魔をしてはいないだろうか。この詩は作者のこういった生い立ちや生活環境によって創られ、こう読み解くのが正しいと呈示されたとき、当該詩は詩であることを止め、論文の一部あるいは一節に変化してしまう恐れがある。少なくとも論者にその自戒があるかどうかは問われると思う。単なる持論にすぎないのかもしれないが、詩は人間を明らかにする哲学の目で接してはいけないのではないか。うっかりすると、そういう「世界」から逃げたくて「詩」なるものを求めたりしてはいないか。別の言葉で以上を括れば、詩は作者(詩人)と読者個々の心の触れ合いの場なのだから、両者の間に這入ってこの読み方が正しいと押し付けないで欲しい、解説など要らないということ。もちろんこれは詩そのもの、詩集自体にたいする接し方であって、解説書や論文そのものへの批難・懇願ではないのでご理解をいただきたい。ちなみに頂戴した本書は後者側に当たる。『石垣りんの詩集』ではなく『石垣りんへの旅』という著書名もそう明示している。

先だって同人誌に寄稿している詩人倉田史子の詩集の寄贈を受けて感想をしたためたところ長文の返信をいただいた。その中にあった言葉に、詩は読み手との「交流」を

経て完成するのだと思う、創った段階では未完だということを常に自覚している、というのがあって共感をした。この捉え方でいけば百人の読者が読めば百通りの感想、解釈が生まれることになる。詩の使命はもしかしたらそこにこそあるのではなかろうか。もちろん詩に限らず文芸に関する作品に共通すると理解できるが、暗誦、愛誦を可能にする詩というジャンルでは特に純度が高いと思われる。自分自身の詩との出会いからしてそうだった。サトー・ハチローであり、島崎藤村であり、ブッセやハイネだった。解釈など思いもよらずにただ口遊んでいたような気がする。また、口遊むに適したリズムも備えていた。年老いたいまも金子みすずの詩の方が読んでいて居心地がいい。だからこそボードレールの詩を読んだときは窒息しそうになったのだった。「こんなの、詩じゃない」と叫ぶほどに。青年期に接した詩はそういう意味でも荒れ野だった。誘いにのって加入した働く仲間の詩の会の中で遭った詩は、労働への単純な苦情の羅列、真っ暗な労使の対立という現場報告、参加もせず実の目で見てもいない戦争描写や避難、平和希求の抽象的な絶叫、それらはシュプレヒコールではあっても私にとっては詩ではなかった。反骨の私が書いた淡い恋の詩は仲間の「総口撃」を食ったと記憶している。甘ったるくて、浮ついている、読む価値もないと。「どっちがだよ」と心の中で返して、退会は必至となった。

　これは詩だがこれは違うなどという思い上がったことは言わない。ただ誰もが「ぼくにとって、わたしにとってはこれが詩なんだ」という感覚を持っていることを詩人の方

も理解すべきだとは思う。十数年前にある詩集を頂戴した。そこに描かれた詩の世界は魔界だった。まったく解からなかった。おそらく作者だけが解かる言葉と想いなのだろう。彼女は、身内からも医者に行けと言われたと屈託なく笑っていた。その後、かなりたくさんの事例に接して、作詩にはそういう側面があるのだと「理解」をした。

かくして私は途中で確認出来てから、少なくとも本書の一回目の読み方としては詩だけを追って行こうと決めた。共感できる作品、好きな詩を探したということになる。二回目は結果として重たい、苦難の道であったことも告白しておきたい。

不謹慎ながら味わった石垣りんの「詩集」に付いて大雑把な印象を記してみたい。もちろん読者としての自分のために。初めに面白いと感じる。浮かべる笑いは「クスッ」程度で軽薄なものではない。この詩人のセンスへの礼賛である。この感嘆符は同時に疑問符を連れてきた、良く考えてねと。最後に唸って腕組み。そんな詩の数々…。傾いでいるのは自分の頭か、それとも詩の方なのか。はたまた俎上に載っている世の中なのか。

最初にマーキングしたのは『家』と題された詩だった。私の生家のありさまとかなり似通った、やり切れない描写と心情が続く。これが詩作のためだけに連ねられた抽象的な一行一行だとは最初から思わなかった。締めに使った「それで困る」で作者と私の心はつながったような気がする。同様に、使われた単語そのものはあちこちに転がってい

るものだが、練って並べて現実に迫る作品『くらし』。家というものがもたらす汚物をこれでもかと重ねていき何度も読み直させるテクニカルな語りの『家出のすすめ』。このあとの二つも私の人生環境に刺激を与えて栞を挟ませた。私もまた生まれた家を呪い、親を蔑み、家を出て、高所を見据え、安息の未来を求めて現実の闇の中を這いずり回っていた過去があるために、より激しく共感するのかもしれない。『定年』にも共感者は数多いるに違いない。本書の著者も言う。『自らの精神のありようを読み手に伝えるという点で、詩はフィクションである小説とは決定的に異なる』と。

しかし、虚構でなくリアルならそれでいいのかは、一つの問題かもしれない。ヴァレリーの『詩はでっちあげるものだ』がそのまま受け取れるものとは思わないが、一掴みの事実の上に立って読み手の心に温かい灯をともすように加工するのも「でっちあげる」の中に入れるならば私たちが愛誦した詩はほとんどフィクションに近くなるに違いない。ハイネの『汝は花の如く』も彼が実際に出会った少女がモデルだというが、詩は極めて装飾的に出来ている。藤村の『初恋』もそうだろう。竹久夢二の『宵待ち草』もそうだと聞いた。個人的に言えば私は、行替えは頻繁にするが経験や出来事を羅列しているだけのように感じられる、前にも例示したように散文もどきの詩は好きではなかった。むしろ響きが美しく、音読して調子のよい、使い古された言葉ですら磨き直されている、そんな詩ばかりを自分の大学ノート「味蘇帳」に転記していたような気がする。例えば『落梅集』の中にある『口唇(くちびる)に言葉ありとも/このこころ何か写さん/ただ熱

き胸より胸の/琴にこそ伝ふべきなれ』。この感覚の伝達手段が詩の神髄ではないかなと。

しかし本書で読んでいく詩の数が増えていくに従い、石垣りんの詩は私が或る意味嫌っていた分野の詩とは似て非なるものだと思い始め、すでに読んだ「場所」へも引き返すことになった。新書本で読んだ詩人茨木のり子の言葉があったのも手伝っている。彼女は「詩」であることの必須条件として「言葉の飛翔」をあげていた。言葉だけではなく「行間の飛翔」も含んでいると理解している。引き返したのは「それ」を確認するためだった。この作者なら在るにきまっているのだから「それ」はあった。勘違いかもしれないが、それにしてもと思うことがある、「りんの死生観」の哀しさだ。直接言葉として死を使っていなくても感じる。もしかしたら「俺にも同じようなものがあるのか」と恐れたりする私がいる。時々彼女の詩文から目を逸らすのはその所為かとも思う。

本書は三分の二ほど進んだところで茨木のり子との対比などに移っていく。その冒頭近くに引かれていたこの言葉には思わず膝を打った。現代詩だけについて語ったのだろうか。そこは詳細には解からないが、私の頭に真っ直ぐ過ぎったのは巷に広がる昨今の歌詞だった。『言葉が多すぎる/というより/言葉らしきものが多すぎる/というより/言葉と言えるほどのものが無い』がそのまま私の現代歌謡に対する不満だったからだ。いや、見誤りの危惧は当然あるが、同人誌掲載の詩の中にもかなりあると感じていた。具体的事象のただの羅列、それこそが現代詩とでも宣言しているようで、ある意味混乱を

した。お叱りを覚悟で毒づくならば「これでいいなら詩の形にする必要があるのか、散文でいい」と、そんな小さな怒りまで生まれた。

茨木のり子、そういえばこの人の上記新書本も最後まで味わって読んでいる。何度もうなずきながらだった。

結論から言えば、生活詩ともいえる石垣りんの作品に真摯に接して、かつて詩の分野を狭くとらえていた私は過ちを認めた。ずかずかと読み手の中に入ってきて直視しか許さないほどの迫力が、この詩人の詩にはあった。それらは十数万字を費やした人生読本より心を突いてきたのだった。しかしそのことが次の推論を可能にする。心に同じような痛みを持った読み手にしか抱かれない「詩集」なのではないかと。

私は同人誌岩漿に寄せた小説『傾いた鼎・全編』の中でヒロイン優布(ゆう)にこう語らせている。『詩集ってね、無料でも興味のない人は持っていかないの。正規の装丁本ならもっていって古本屋で換金するって手もあるけどね。無名の詩人でも興味のある人は手にするわ。だけど、そういう人は詩とか短歌に特別なイメージをもっているから』と。私はここに言うところの『そういう人』だった。本書は、私の中の『特別なイメージ』に格段の広さを与えてくれたように思う。

茨木のり子はひどい先生だ。本書の終わりに近づいたところで、頭ごなしに私をとい

うか、

読み手である私の人生を、一編の詩『自分の感受性くらい』で叱り飛ばしたのだ。じつに容赦がなくて心身が痺れた。文学は今回もまた辛辣だった。

※以上、失礼且つ拙き読後感。2019/6/4